

職場の構内で初夏を迎えると、アオギリは枝先に大きな円錐花序を広げ、淡い黄緑色の小さな花を無数に咲かせます。一つ一つの花は直径約一センチほどと目立ちませんが、花序全体では数百もの花が集まり、樹全体がやわらかな緑色の霞をまとったような姿になります。花弁はなく、花びらのように見えるのは五つに裂けた萼で、雄花と雌花が同じ木につく雌雄同株です。ハナバチやハナムグリ、ハエの仲間などが花粉を運び、受粉した雌花だけが果実へと成長していきます。

夏の間に果実はゆっくりと大きくなり、秋になると五つに分かれた袋状の果実が赤褐色に熟して裂け、中から黒く光沢のある種子が姿を現します。この木も毎年たくさんの種子を実らせ、秋から冬にかけて地面には黒い種子が数多く落ちています。種子は比較的大きく存在感があるため、木の下を歩くとその豊かな実りに気づかされます。発芽した実生を見つけることもあり、旺盛な繁殖力を感じさせる樹木です。

アオギリは若葉が赤く色づき、成長とともに鮮やかな緑へと変化する姿も美しく、春から冬まで季節ごとに異なる表情を楽しませてくれます。花は決して華やかではありませんが、その後に続く見事な結実は、この木が多くの昆虫の助けを借りながら次の世代へ命をつないでいる証でもあります。毎年繰り返される開花と結実の様子は、身近な構内にありながら、植物の巧みな繁殖戦略と四季の移ろいを静かに教えてくれる自然観察の好題材となっています。

(2026 年 7 月上旬／文京区お茶の水女子大学構内)

